山崎郷土研究会
NO. 126
28.2.27
山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町
大谷司郎

桓武伊和神社について

大谷司郎

一、はじめに

揖保川の支流伊沢川を約一〇km北上した山崎町中野字宮ノ元に桓武伊和神社がある。地元では「かんむさん」の呼び名で親しまれている神社である。氏子は東下野・中野・上ノ下・上ノ上の四自治会で、戸数約三百戸である。つまり都多の里の氏神さまである。

二、郷土会報での当神社の記述

桓武伊和神社については、会報八二号（平成五年九月十日発行）で片山昭悟氏が「山崎町梵鐘集成―金屋村鋳物師長谷川氏を中心として―」の中で、山崎町金谷の長谷川氏が鋳造した梵鐘・喚鐘の集成をされているものの一つとして当神社境内の梵鐘が紹介されている。次に会報一〇二号（平成十五年九月十五日発行）で同氏が「中野の桓武伊和神社と平安時代の鏡について」の中で、昭和八年に神社裏山が発掘調査された経緯や近くから出土した鏡について考察されている。

また、会報一一三号（平成二十一年四月十八日発行）の山崎歴史街道（十七）「五十二、桓武伊和神社と社叢」でも会報部から桓武伊説のことや、境内の早良社や三体の仏像、裏山社叢の樹木のことなどが紹介されている。

なお、遡って当会の前身である宍粟郷土研究会が発行した会報『ししさは』第一輯（昭和八年八月十五日）には、桓武伊和神社背後の古墳の調査がされていることと、境内の梵鐘の陰刻銘文を全文紹介している。続いて発行された第二輯（昭和九年二月二十日）では、「永井瓢斎と桓武伊和神社」で同氏が現地入りした記述が見える。

目次

桓武伊和神社について ……大谷司郎 1
エッセー ～夢かぞと思う～ ……浅田耕三 5
秀吉軍の陣城か 柏原城跡 ……竹内克司 6
京都御所と琳派京を彩る展の見学 ……浅田茂樹 9
ホタルの里やまさき（前編） ……河本雅視 10
やまさきの風景 大フゴ山 ……里見亘 12
山を歩く ……鳥羽正泰 13
宍粟山崎の江戸時代の貴重な文化遺産
揖保川の浜御殿周辺のことについて ……史跡部 14
金谷の古墳の立地状況の考察 ……片山昭悟 15
宍粟市の梵鐘（江戸時代）年代順集成（Ⅰ） ……片山昭悟 16
会員・家族の文芸 ……19
事務局だより・編集後記 ……21
平成二十七年度・平成二十八年度の役員名簿 ……22

三、神社名について

全国に神社本庁に包括されている神社が約八万社ある。その中で、神社名に天皇の諡号を冠した神社は三〇社と、極めて少ない。三〇社の中で、社格が高く全国的にも知られているのは明治神宮のみで、他には旧官国弊社は一社もなく、郷村単位の局地的な信仰を集めている神社ばかりである。なお、この三〇社の内、桓武天皇の諡号を冠した神社は当神社のみである。（註1）

このようにみると神社の国家管理時代を経てもなお天皇の諡号が残っているのは例外的なことといえる。当神社の社格をみると『兵庫縣神社誌』には「村社」とある。また、大正十二年（一九二三）に発行された『兵庫縣宍粟郡誌』によると「村社桓武伊和神社　明治七年（一八七三）村社格ニ加列」とあり、社格は村社である。

では、神社名として桓武伊和神社と呼ばれたのはいつ頃からかというと、記録として確認できるのは左の通りである。

（一）「代々御氏寺宮ぢかうさん之覚」大友克直氏所蔵文書（山崎町上ノ下）

一　氏大明神じかうわう里うさんくわんしゆう寺くわんむ岩大明神様（以下略）

元禄拾六年（一七〇三）未ノ二月吉日

とある。平仮名の意味が理解しがたいが、我が師である故宇野正碆氏が書かれた『語り継ぎサロン』№二一号〔山崎古文書研究会編、昭和六十三年（一九八八）発行〕に「ぢかう」や「じかう」は「じこう」で、神戸の「神」を「こう」と発音する例をあげて、じがみ＝地神と解するべきとされている。「わう里うさんくわんしゆう寺」は山号と寺名とみて、その寺の所在は確認できないが、「おうりゅう山かんしゅう寺」と読める。その次にある「くわんむ岩大明神」が桓武伊和神社であることから、元禄十六年には桓武の神社名が使われていたことがうかがわれる。現在確認できる史料としては一番古いものである。

（二）境内の梵鐘の銘文

当神社正面の鳥居のすぐ南側にある鐘楼の梵鐘に製作時に陰刻されたとみられる銘文がある。前述した会報『ししさは』第一輯と『兵庫縣神社誌』、さらに後述する『桓武伊和神社記』にその全文が示されている。私は現地で梵鐘の文字を確認しながら書き写したので全文を次に記す。

播磨國完粟郡都多谷氏宮桓武伊和大明神鐘之銘并序

夫　当宮者人皇五十代桓武天皇也　延暦改元壬戌秋退王室在御幸于此地而不経幾春秋而終崩御於此境給　即谷中三ヶ村奉祭礼氏神明以来到今居諸凡得九百三十三年　神功広大神徳増盛臨時祈誓則現直無不蒙感応　正徳二壬辰冬十一月下旬鋳洪鐘一箇而代々賑神境処何時破砕之失却不知其中絶既六十三年也　今神司立石伊和見守藤原是兼嘆息而告氏子矣自往昔伝来之宝物以何新造焉時哉　氏子挿誠精而村落干遠近而勧十方貴賤男女集一粒一銭之助成而忽命治工鋳成洪鐘而高築宝楼粧衆宝寔是志願不空五穀成就福寿増長随意而二世之願望円満也永掛室前而天下泰平万萬民豊禾別而施主家業昌栄児孫長久所願如意宜哉慰宿願是歳　宝暦十一龍次辛巳仲冬中浣也為祈之後世請干予銘予雖不敏不能其義書洪鐘之表　而已

銘　曰

金口木舌　号令無窮　虚而応能　動而皈止　応用無相
超生雖死　此声聞者　無不入理　此鐘聞耳　耳是聞鐘
雖異音聞　元出一揆　聲々円通　聞々亦筴
宝暦十一辛巳歳十一月吉日
寄進施主　氏子中
播州完粟郡金屋住
治工　長谷川孫兵衛藤原吉正
長谷川五良兵衛藤原家次

銘文では、桓武天皇がこの地で崩御されたので、都多谷の三ヶ村（上ノ村、中ノ村、下ノ村）で氏神として奉祭したのは、鐘が鋳造された宝暦十一年（一七六一）より九三三年前とあるから、逆算すると天長五年（八二八）となる。そして、正徳二年（一七一二）に鋳造した鐘が破損したので宝暦十一年に新鋳したとある。正徳二年の鋳造時に銘文が刻まれたかどうかは不明であるが、桓武天皇伝説が宝暦年間の一七六〇年代にはこの地に根付いていたことを示すものといえる。

さらにいえば、大友氏文書では一七〇三年に地元の文書で「桓武」の名があることから、桓武伝説は少なくともそこまで遡ってよいのではないかと思われる。

余談ではあるが、先の第二次世界大戦時に社寺の鐘を供出するよう軍から命じられたが、桓武天皇の陰刻銘文のおかげで供出を免れ、現在に残ったと古老の言葉を聞いたことがある。

ただ、同時代の記録を追うと、元禄六年（一六九三）に天領地内の村々の高・反別等を記録した『播磨国完粟郡村々反別郡玉帳』の中ノ村の項に、

岩大明神　神主上ノ村甚左右衛門　造立之年　勧請之主　知不申　境内宮林　立百廿間　横六十九間　社領高二石五斗

とあり、桓武の文字は見えない。

また、宝永五年（一七〇八）に片岡醇徳によって書かれた『宍粟郡誌』には、

一伊和大明神　上ノ村（ママ）に有　祭日九月中巳初　下ノ村より北都多谷中の生社也

とあり、桓武の文字はここにも見えない。（註2）

『兵庫縣神社誌』では当神社の由緒として

鎮座地の山上に桓武天皇廟所と伝ふる所ありて其真否は論外とするも、当社が桓武天皇と深き由縁ある地たるにより同天皇を此地に祭祀するに至りしものなるべし（以下略）

とある。同書に記述するように、桓武天皇の廟所と伝わるところがあり、「真否は論外」としてこの神社が桓武天皇と深い由縁があり、それらのことが当地に伝承として今に伝わっていることと、同天皇を祭神として祀っている神社がある、この事実は変わることはないのである。

四、桓武伊和神社記のこと

昭和二十九年（一九五四）に神職の大部彦吉氏が書かれた『桓武伊和神社記』には、当神社にまつわる伝承や基本財産のことなどが四十四ページにわたって書かれている。主なもの上げると、

① 天皇の命を伝える弘仁三年（八一二）の「宣命写」を紛失した経

過を氏子伝説としていること
②梵鐘の銘文のこと
③当株、故当株など当屋制のこと
④年中の祭礼のこと
⑤末社と祭神のこと
⑥高家里のこと、都ヶ岨と寺谷のこと
⑦早良親王の伝説のこと
⑧境内地および建物、社領のこと
などが記されている。このレポートを書くにあたって当神社記を参考にさせてもらった。

五、おわりに

この神社は、桓武天皇の言い伝えが今に残る特異な神社といっていいだろう。昭和八年（一九三三）には神社背後の宮山の発掘調査がなされ、当時の蔦沢村にとって大ニュースであっただろう。桓武天皇の御陵であるという伝説が現実のものにならないかと、地元の人たちは期待が大きく膨らんだことだろうと思われる。調査により、銅鏡や経石多数、刀剣などが出土したが、結果的には桓武伝説を裏付けることにはならなかった。

そんな経過もありながら、伝説はこの地域の今に生き続けている。桓武伝説に限らず、地域の言い伝えや民話は、祖父母から聞いて覚えているとか、近所の人からの口伝えで残ってきていたが、現在のような、この情報氾濫のなか、また、核家族や少子高齢時代に一昔前の伝え方では通用しないし、消滅するしかないように思える。しっかり書き留めることと、記録媒体に残していくことが急務といえる。

註1　『卒業論文　兵庫県都多地区の桓武伊和神社と桓武天皇御陵について』（平成二十五年十月）で発行者中立勝子氏が神社本庁より提供を受けた資料による。

註2　『播磨三九號　宍粟郡誌』（昭和三十三年七月十日西播史談会発行）を引用した。

参考文献
・『山崎郷土会報八二号・同一〇二号・同一一三号』
・『ししさは第一輯・第二輯』
・『兵庫縣神社誌』
・『兵庫県宍粟郡誌』大正十二年発行
・『語り継ぎサロンNo二一号・No二二号』
・『播磨國宍粟郡村々反別郡玉帳』
・『播磨三九号　宍粟郡誌』
・『桓武伊和神社記』

桓武伊和神社鳥居

桓武伊和神社拝殿

エッセイ　～夢かとぞ思ふ～

浅田耕三

平安貴族の美女の第一条件は髪の美しさであったという。目鼻立ちより色の白さよりもっと大切な、背丈より長いその黒髪を色あざやかな袿や唐衣、裳の上へふわりとなびかせて彼女たちは寝殿造りの母屋や廂の間、渡殿を優雅に歩いていたのであろう。

そんな長い髪を洗うのは一苦労だったにちがいない。そのへんを流れる川や小溝で双肌脱ぎになって洗うわけにはいかぬ高貴な身分の帝の妃やそれに侍る女房たちである。実家下がりの時などに奥まった曹司で洗っていたのであろうか。

『源氏物語』にも六条御息所が芥子の実の匂いのついた髪をいそいで洗う所が出てくるし「若菜」の下巻には病み上がりの紫の上が洗い髪を乾かしながら池の蓮の花を眺める場面がある。

洗剤は灰の灰汁や米の研ぎ汁である。髪を洗う湯水をいれる器は泔坏という漆器や銀器であった。木地に漆を塗る技術はすでに縄文後期には開発されていたらしい。

木地は一木彫りで、広葉樹の巨木を轆轤でくりぬいて作っていたのである。ではこの王朝貴族の女性たちの使う泔坏の芯の木地はどこで生産されていたのであろう。

京に近い但馬、播磨、越前あるいは木地師発祥の地とされる近江などであろうか。需要も多かったろうから多分それら京の近国のどこからも入っていたと考えて間違いあるまい。

『蜻蛉日記』の藤原兼家の妻や中宮定子たちも使っていたであろう漆器がひょっとしたら播州奥地の山崎町の河原山や一宮町の公文や波賀町の原や赤西へんで作られていたと想像すると何となくたのしい。

宍粟の奥地には各地に木地師の痕跡がある。それは木地師ゆかりの地名や伝承である。

彼らは木地を求めて山へ入り木を伐って椀や鉢、匙を作り生業としていた。しかしそうすれば当然土地の住民との間に木材の所有をめぐってあらそいが生じたはずである。その障害を排除するため木地師たちはある権威を携えていた。

平安中期、五五代文徳天皇の第一皇子惟喬親王が出家して京から近江国小椋庄に移られ付近の住民に轆轤の技術を伝授された、とする。その術を会得した住民が日本各地に移住して木地師となったというのである。

彼らは自由に山の木を伐る権利を親王から与えられ、その綸旨をたずさえていた。その書類も現存しているようだ。

惟喬親王は聡明で性温順、父帝に深く愛され、当然立太子されるものと世間はみていたが、時の権勢家藤原良房の娘で文徳帝の皇后明子の御子、第四皇子の惟仁親王がわずか生後九カ月で立太子された。のちの清和天皇である。惟喬親王の母は紀名虎の娘静子で身分は更衣、明子とは格段の力の差があった。

日本歴史の中で勢力闘争に敗れて廃太子となる例はほかにいくつもある。惟喬の皇子はその例ではないが古代説話文学の中では悲劇の皇子として最も多くとり上げられ、さまざまに脚色されている親

王である。

その第一は『伊勢物語』。八二段には在原業平と思われる人物、右馬頭（うまのかみ）と大阪の交野の原で終日鷹狩りをし花見をたのしみ酒を汲み和歌を詠んで風雅の途にいそしむ。八三段は一転して二七歳で思いがけず比叡山西麓小野郷に庵を結んで出家遁世された親王を見舞う右馬頭が別れにあたりさみしい歌を詠む。

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや
　雪ふみ分けて君を見むとは

惟喬親王流離譚はほかにも『平家物語』巻八に出ているし、私はまだ読んでいないが『曽我物語』にもあるらしい。

惟喬親王は六国史（りっこくし）の『日本三代実録』に記されている実在の人物でしかも実際は諸説話に記されているほど悲劇的な境遇でなく、それなりに恵まれた生涯だったらしい。若い時の出家隠栖は病にかかった人が死後の浄土をねがう手段であり、この時代の人たちのならわしであった。

親王にまつわる諸説はいずれも日本人特有の「判官びいき」の生んだ創作であろう。しかしそれにしても轆轤の術を伝授された親王とはなんと奇抜な発想であろう。

参考「漂泊の山民」橋本鉄男　白水社
「木地師のふるさと」橋文策　未来社
「伊勢物語」岩波文庫

秀吉の陣城か　柏原（かしはら）城跡（じょう）

竹内克司

国見山の背後に位置する

この城の所在地は宍粟市山崎町金谷字石ケ谷。宍粟市南部の標高約四九〇メートルにあり、揖保郡新宮町奥小屋（たつの市）との郡境の尾根上に位置している。国見の森の登山コースの途中、谷を左にそれたところに、遊鶴寺跡がありその上部から取り付き、谷深い山の急斜面に設けられた登山道を斜めに横切って登り詰めると緩やかな尾根筋に至り、その先に城跡がある。

城跡は国見山（標高四六五メートル）の西方に位置し、国見山より少し高いため、国見山の東斜面一面の杉林の上に山並みが見え、揖保川を眼下に見下ろす国見山の展望台からの景色とは大きく異なる。

明確な出郭と不十分な主郭背後

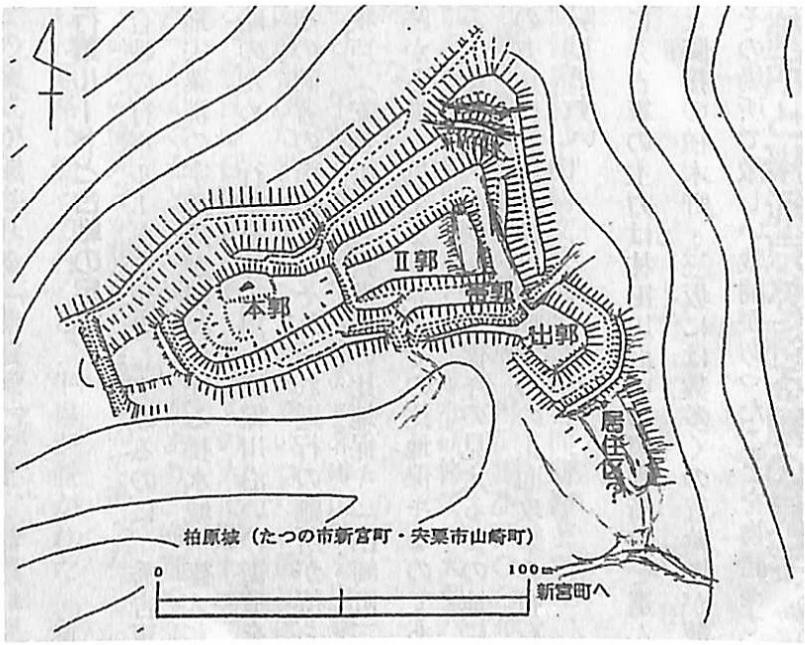
柏原城の形状については中央の主郭と思われる削平地の周りには、幾筋かのなだらかなU字型の堀跡がはっきりと残り、人為的な平地が奥に延びている。

特筆すべきは堀切と切岸による約十五メートル四方の出郭、出郭と城内をつなぐ土橋、北尾根には複数の掘切があること。そして本郭の背後はあまり手が加えられていないことである。

柏原城跡（Ⅱ郭）

堀切

柏原城（作図：山下晃誉）一部加筆



柏原城

下界の見えぬ城

この城跡には過去何回か訪れた。事前の下調べでこの城は長水城の支城と言われそのつもりで見たのだが、なぜこの場所なのかしばらく疑問が残っていた。それは、宇野氏の支配域の最南部の防備・見張りなら国見山の展望台あたりが最適なのだが、そこに城跡はなく、なぜかその背後の高山のほとんど下界が見えない場所にあるからである。

ここから遠く長水城が見える。長水城とは狼煙（のろし）によって連絡した説もあるが直線コースで約六キロメートルと距離的にも狼煙説には疑問が残る。さらにこの地が郡境にあるということと、この城の大手道は新宮町奥小屋にあると考えられ、そのため結論的にはこの城は長水城の支城ではなく、まったく逆の長水城を見張る敵の城ということになる。

『播磨鑑』に見える柏原城の所在地の比定

では誰が何のために築いたのかということになるが、そもそもこの城跡については、『赤松家播備作城記』には記載がなく、『播磨鑑』に「柏原城　城主は早瀬帯刀正義居、同構居　柏原三郎頼宗」とあるのみで築城期や所在地の記載はない。『新宮町史　第五巻　昭和三十八年発行』には、その所在地は山崎町金谷に比定している。その根拠について城郭研究家の山下晃誉氏は町史編集者の高坂好氏が「金照寺縁起（新宮町牧村）」に「其近辺（筆者註…草尾山幽閣寺）ナル峯ヲ横ニ堀キリ、一夜ノ内ニ新城ノ形ヲ顕シ」に基づいて比定したのではないかと推測している。以後柏原城の所在地は山崎

町金谷として日本城郭全集　昭和四十二年発行」や「兵庫県中世城館・荘園遺跡　昭和五十七年発行」で紹介された。

一夜にして姿を現した城は秀吉軍の陣城

山下氏は現在柏原城として周知されている遺構が『播磨鑑』に見える柏原城と同一である根拠はないとし、さらに「金照寺縁起」に記される城郭が柏原城である根拠もないとしている。

そして、現在の遺構は職豊期の陣城の特色と一致しており、「金照寺縁起」に記される一夜の内に姿を現した城と結論付けている。

秀吉軍の行軍ルートと合戦の足跡

当時の合戦の行軍ルートを想像してみるのに、秀吉軍は播磨北部の辺境の地宍粟郡の宇野氏が堅固に守る長水城・篠ノ丸城及び周辺の構の攻略のため、行軍を林田川と揖保川沿いの街道を二手に分けている。その両者の街道にはそれぞれ通行の難所が待ち受けている。林田川の狭戸（安富町）と揖保川の比地保キ（ひぢがほき）（山崎町）である。この柏原城跡から唯一見える下界がその比地保キなのである。長水城を北に望み、南に最大の難所比地保キの見えるこの地に城を築き、出郭をその方角に置いたのは宇野攻めの正面攻撃の布石であったと見ると理解しやすい。

結果的に秀吉軍の主力は林田川沿いの因幡街道を選んだようである。狭戸と隣接の植木野・三坂には数多くの五輪塔が散在している。それらはその場所で激しい戦闘があったことを物語っている。

戦後、秀吉が四国の長宗我部元親への手紙で長水城のことを「山峰けわしくして大河城のふもとを巻き候」と表現し、構二カ所と篠ノ丸城を落として宇野勢を長水城に追い込み責め崩す様子をつぶさに伝えている。

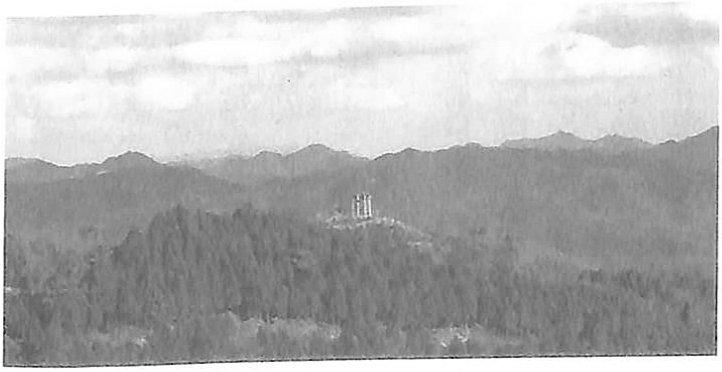
新たな歴史ロマン

では、この柏原城が職豊期の城跡であるとすれば、宇野氏の支城柏原城・構居はどこにあったのかということについては、今後の歴史ロマンとして残されることになったと私は思っている。

参考……『図解　近畿の城郭』「柏原城」山下晃誉、「柏原山城」藤原孝三氏

北方に見える長水山

比地保キ周辺



中央が国見の森の展望台

京都御所と琳派京を彩る展の見学

浅田茂樹

今年の研修旅行は山崎文化協会との合同研修となり、京都御所の一般公開と京都国立博物館の特別展「琳派誕生四〇〇年記念特別展示・琳派京を彩る」の見学という豪華な研修で、大型バスの予約はすぐに満席になったようであった。

十一月一日、午前八時会員で満席のバスは山崎を出発し、色づき始めた中国道をひたすら京都へと進んでいった。最初は京都御所の見学である。当日は日曜日とあって多くの人で賑わっていた。入口の「宣秋門」をくぐると、「御車寄」があり、華麗な金屏風が飾られていて、御所の優美さが想像できるものであった。

そこからは順路に従って行くと、牛車が置かれた「新御車寄」即位の礼などの儀式が催される「紫宸殿」など、普段は見られない場所を人混みに流されながら巡っていった。「蹴鞠の庭」では、きらびやかな衣装を着た人たちが蹴鞠の実演をしておられ、秋の気配が漂う庭の木々と絶妙の風情を醸し出していた。

その後、昼食もそこそこに、琳派展の行われている京都国立博物館へ急いだ。琳派展は創始者とされる本阿弥光悦が琳派を開いて四〇〇年になるのを記念して開催されるもので、琳派の代表作で国宝や重要文化財を含む多数の作品が展示されている。

会場は大混雑で、九〇分程度並んでやっと入館できた。館内は照明が落とされていて薄暗く、作品を照らす明かりを頼りに、絵画や工芸品、屏風絵などを観て回った。どの作品にも作者の気迫と魂が込められていてすばらしいものであった。その中でも、琳派を象徴する「風神雷神図屏風」は他を圧倒する存在で実物に接する幸運をかみしめながら、しばし見入っていた。

今回の研修では、京都の古い歴史と伝統に育まれた格式高い京都御所のたたずまいを見学し、同じ地で開花した琳派の数々の作品を鑑賞する事ができ、心満たされる思いで帰路につくことができました。企画やお世話くださった研修部の皆さんに衷心より感謝申し上げます。

京都御所

京都国立博物館

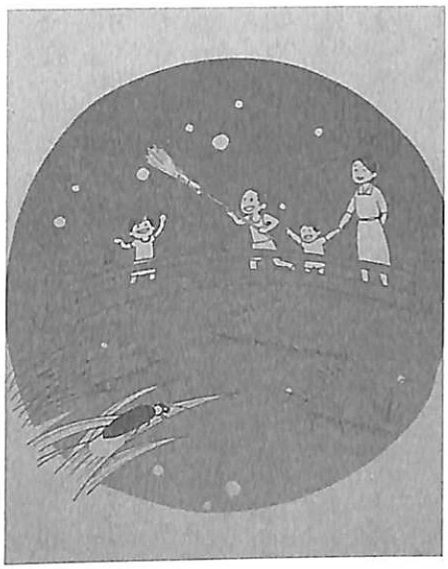
京都御所蹴鞠

「ホタルの里」やまさき（前編）

河本雅視

一、ホタルの今昔

今年もホタルのシーズンが近づいて来ました。ホタルは万葉の頃には日本人の心の中にあって、万葉集にもホタルの歌が載っており、また、江戸時代の松尾芭蕉の句にも「昼見れば首筋赤きホタルかな」など、多くの歌人や俳人に歌や句が詠まれています。初夏の夕暮れ時になると、日本の各地でホタルが飛び交い、川面を飛び交うホタルは日本人にとって心のふる里ではなかったのではないでしょうか。



山崎町に於きましても、昔からあちこちの河川で沢山のゲンジボタルが飛び交い、子供たちは親と連れ立って、橋の上から蛍狩りを楽しみました。昭和の初めころは、金網のホタル籠もありましたが、ホタルブクロという草の花や、ねぎの筒の中にホタルを入れて、花や筒の中でピカピカ光り漏れる光を見て楽しむこともありました。また、丁度その季節はハダカムギの収穫時期であり、収穫を終えた麦わらを束ねて竹竿の先に括り付けたほうきのようなもので飛ぶホタルを追っかけて捕りました。

二、山崎のホタル

山崎で見られるホタルは、ゲンジボタル、ヘイケボタル、そしてヒメボタルです。その他数種類は幼虫の時は光りますが、成虫になると光らないのであまり知られていません。

①先ずゲンジボタルですが山崎町でも一番多いホタルです。特に多い川は、揖保川支流の菅野川や伊沢川などですが、どの川も水質汚染や、縁日などでホタルを売る業者などの捕獲によって、一時は本当に少なくなっていました。しかし現在は下水道が整備されてホタルがよみがえってきたと思われます。

ゲンジボタルの大きさは、雄は一三ミリ前後、メスは雄より大きく約一七ミリ前後です。その特徴は黄緑色の光を二秒間に一回の明滅をしながら飛行します。しかも群舞するのは雄だけで一斉明滅をしながら飛行するので、その光景は時間の経つのも忘れるほどです。雌は草むらにいてあまり飛ばず雄を待ち受けます。

ゲンジボタルの見分け方は、芭蕉の句に、「首筋赤き」とありましたが、その赤いところをよく見ますと、中央に黒いプラス形に見えるしるしがあります。ホタルの種類はこの部分で見分けられます。（飛ぶ期間は大体六月上旬から中旬末までぐらいです）。

ちなみに、ホタルの明滅周期はホタルの種類によっても違いますが、同じゲンジボタルでも、西日本と東日本とでも違い、大体西日本では二秒の明滅周期ですが、東日本のゲンジボタルは四秒の周期であり、また境界近辺のホタルは三秒と言われています。

② ヘイケボタルは、かつては灌漑用水路や湿地の水溜りなどにたくさんいましたが、水路はコンクリート化され、また水溜りは農薬などで汚染されてその姿を見ることが少なく、貴重なホタルになりつつあります。

大きさは十ミリほどで、光もやや弱く、点滅周期も約一秒間隔であり、ゲンジボタルより小さいけれど可愛いホタルです。

見分け方は首筋の赤い部分に縦に太黒くマイナスのしるしを見ることが出来ます。（期間はゲンジと同じ頃より少し遅くまで）。

③ ヒメボタルはヘイケボタルよりなお小さく、六～七ミリほどですが、光に特徴があり黄色で強いフラッシュ発光です。ある地方では金ボタルと呼ばれています。また飛ぶのも雄だけで低く飛び、そしてあまり飛行しません。雌は羽が退化して飛べないので限られた地域にしかいません。そしてまた陸（オカ）ボタルですから流れに関係なく山裾や森の一部に生息します。見分けは、首筋のハート形？です。発見されたら捕獲しないで教育委員会への報告をおすすめします。（飛ぶ期間は山崎では七月、地域で差があります）

三、世界のホタル

日本にはゲンジボタルやヘイケボタルなどがいますが、世界ではどうでしょう。ホタルの種類は、約二千種、日本だけでは約四十種前後いるといわれています。しかし、そのほとんどは陸（オカ）ボタルと言って一生を陸上で過ごします。ところが、日本のゲンジボタルとヘイケボタルなど数種だけは、幼虫時代を水中で過ごす珍しいホタルです。水のなかで過ごすので、水ボタルとも言いますが、山崎町をはじめ、日本にはその珍しいホタルが沢山いるのです。

また、ホタルは発光する昆虫ですが、世界のホタルが皆ゲンジボタルのように美しく光るかと言いますとそうではなく、その多くは光が弱いもの、幼虫時代だけ発光するもの、昼行性で昼間発光せずに活動するものなどが多く、日本にいるゲンジボタルやヘイケボタルのように強く発光するものは少ないようです。

ただ熱帯アジアで見るホタルは、珍しい光景が見られるようです。発光生物学者の羽根田弥太先生を以前お尋ねして、お聞きした話によると、ニューギニアの熱帯雨林に住んでいるホタルは、一センチほどの大きさのホタルが、一本の大木に何万匹と群がり来て、その大群が上から下へ、下から上へ、波を打つように一斉に明滅するということでした。

また、私がアメリカのケンタッキー州で偶然見つけたホタルも、その明滅が変わっていて、約五秒間に一回の発光で、しかもフラッシュ発光であり、光ったと思ったとたん暗闇になり、また思わぬところで光り、捕えることはなかなか困難でした。やっととらえましたが、体長一センチ余り、少し痩せ型でした。変わった光り方に驚きでした。

日本のホタルは世界に誇れる貴重なホタルです。

やまさきの風景　大フゴ山

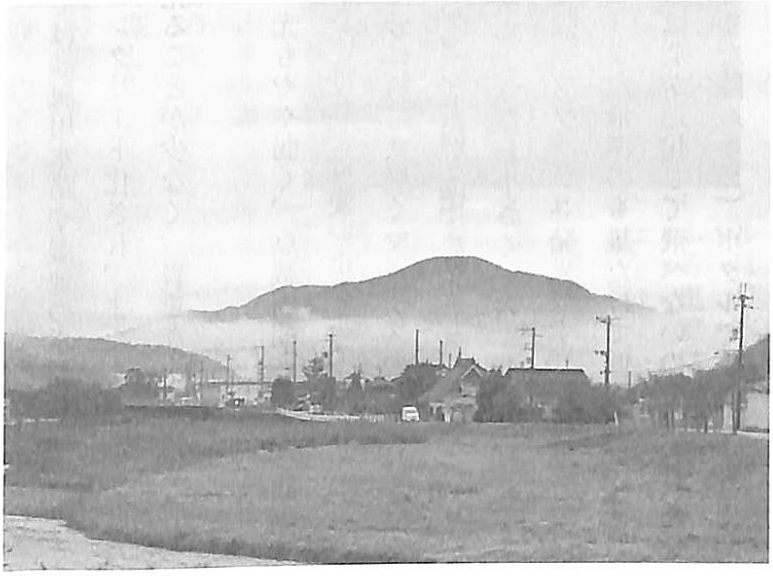
写真　里見　亘
文　片山昭悟

宍粟市山崎町川戸に富士山のようにみえる大フゴ山がある。須賀沢の国道二十九号線の南に見える山で、これが神の宿る山「神奈備山（かんなびやま）」としての山ではないかと思った。

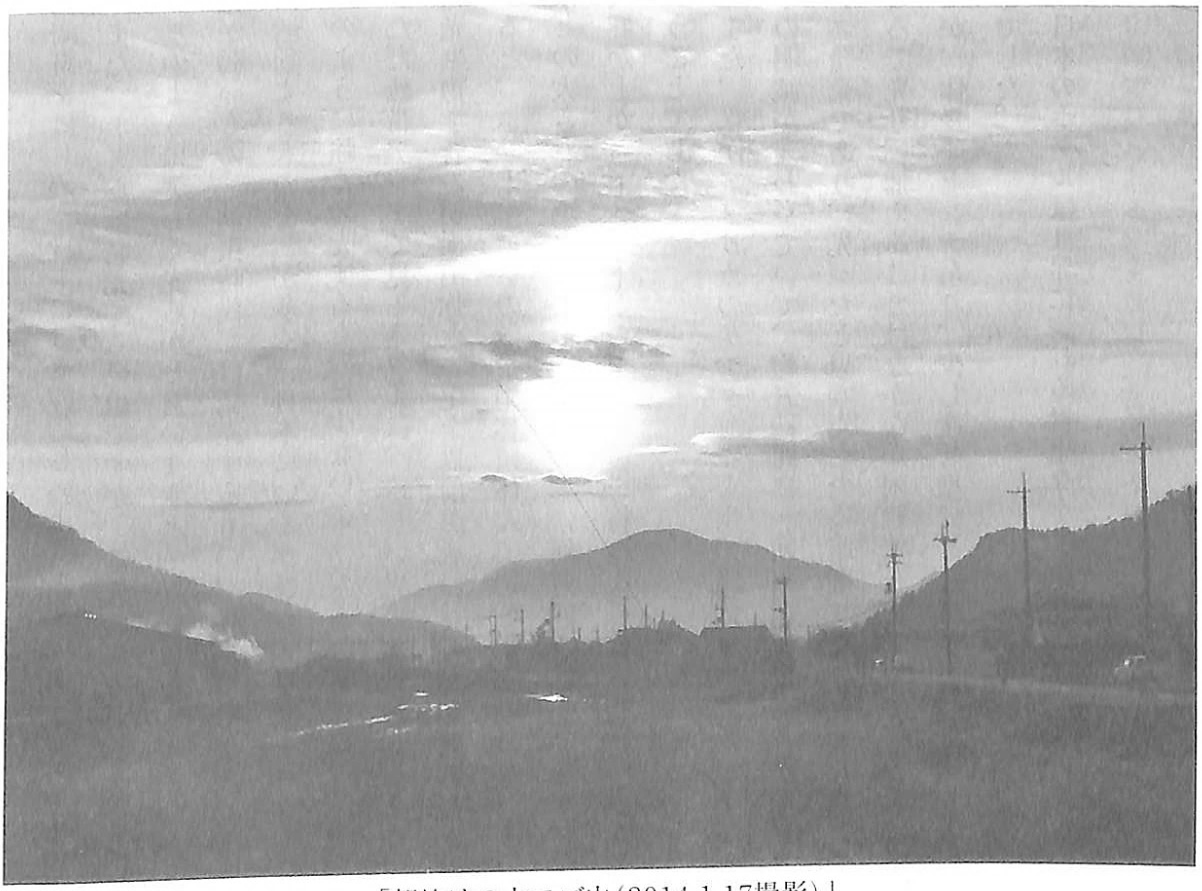
この山は菅野の谷から見るのと蔦沢の谷から見るのと山崎、篠の丸から見るのと位置的にみても同じようにみえる山で、城下の金谷からは川戸山から北へ連なる峰の東に位置しているので、これまであまり意識して見ていなかったが、改めて大フゴ山をみるとちょうど富士の山に似ていて、宍粟の富士のようで、神の宿る山ではないかと思われる不思議な山である。

今回里見亘さんが二〇〇八年一月から二〇一六年二月までの間に撮影された六十二枚の中から二枚を紹介させていただいた。

なお、撮影場所はいずれも山崎町高下である。



「朝霧の大フゴ山（2015.11.18撮影）」



「朝焼けの大フゴ山（2014.1.17撮影）」

山を歩く

鳥羽　正泰

私も当年で傘寿をむかえました。

ふりかえってみると、よくもまあ元気で親の年をはるかに越えて長生きができたもんだと、感無量です。

先日、テレビのＮＨＫの番組で毎日を歩いて病気の予防をしようという、番組がありました。なんでも、一日八千歩歩いて、その内二十分ほど速足で歩けば、認知症やがんの予防・腸・肺の強化・高血圧の予防になるとの話しがありました。

一日八千歩ぐらいなら、一本松（篠の丸城跡）へ登ればおよそ、七千歩程になる。たびたび登っていれば、よい出合にも会う事もあります。写真の茸はどれも一本松で見かけた茸です。

出来るだけ、のんびりと、キョロキョロしながら歩いてみてください。思わぬ発見もあるかもしれません。

暖かい日がくれば、山は生きいきとしてきます。楽しい出合がある事に期待して、頑張りましょう。自身が健康である様、毎日を楽しく過ごす事のために。

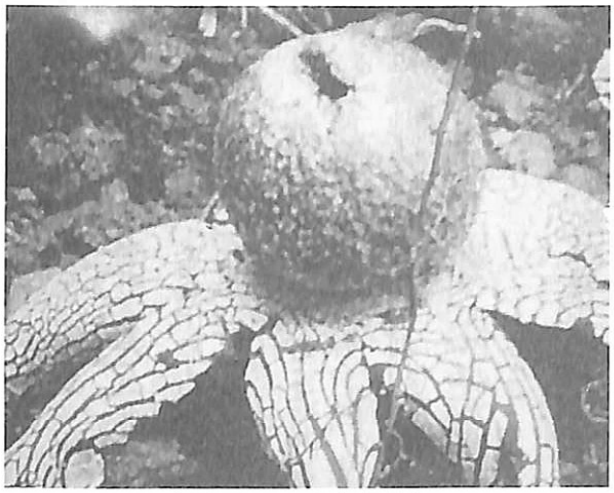


写真１　ツチグリタケ

写真３　ハチノスタケ

写真２　ベニナギナタダケ

宍粟山崎の江戸時代の貴重な歴史文化遺産

揖保川の浜御殿周辺のことについて

史跡部

昨年の十二月二十二日の午前中に、山崎郷土研究会大谷会長、史跡部、会報部、事務局で国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所龍野出張所により今宿地区堤防整備工事が行われていることから緊急に現地調査をおこなった。

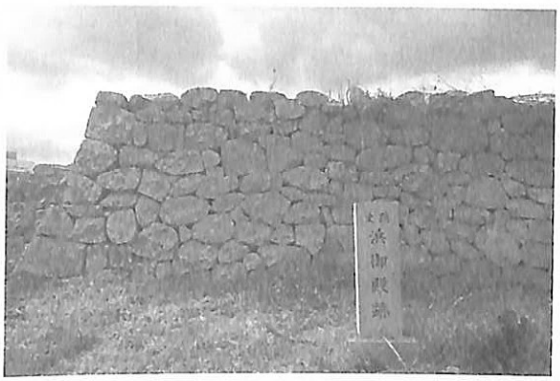
今回の工事地区は、江戸時代の宍粟山崎にとって大切な役割をした山崎藩主本多氏の別邸があった浜御殿跡（水見御殿とも）や倉庫群の石積みが、このたびの工事で破壊される予定であるとのことで、山崎郷土研究会として現状で保存することを宍粟市建設課に要望し、国土交通省龍野出張所にも陳情する予定でお願いしていたが、設計上やもえないとされ、十二月二十八日にはすでにこれらは破壊されていて、わずかな石積みが一か所にあつめられていた。江戸時代の山崎にとって高瀬舟で木炭や材木、千種鉄を網干港まで運ばれる海運業は、大坂や京都への重要な役割をしていた。

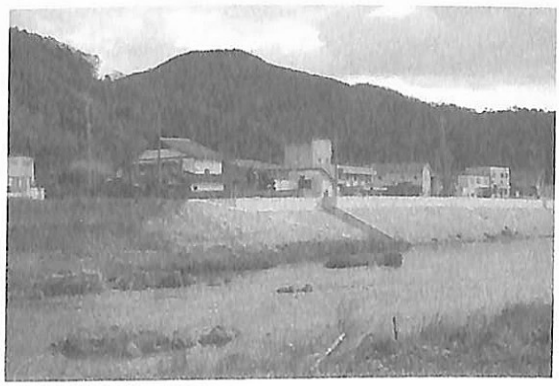
山崎郷土研究会では、浜御殿や高瀬舟の舟着場については、伊藤一郎会員が一二五号で揖保川の浜御殿周辺のことについて紹介されているが、これまで国土交通省龍野出張所や山崎町にも陳情されている。堀口春夫元会長さんや宇野正碌先生、元会長の森本一二先生、下村哲三さんが詳しく調査されている。

忘れてはならない山崎の貴重な文化遺産が無くなった。

そして、山崎小唄で知られる揖保川の十二ン波として親しまれた風情が工事によって大きく変化している。山崎郷土研究会として残していただきたい極めて貴重な歴史文化遺産でもある。

浜御殿周辺写真（山崎町今宿の宍粟市役所から北東へ約２００mのところ）





金谷の古墳の立地状況の考察

片山昭悟

宍粟市山崎町金谷の古墳は、兵庫県指定文化財の金谷山部古墳が知られる。

国見山から派生する亀ケ尾の尾根上の先端に位置し、城下平野が一望できる。古墳時代中期の古墳である。

このほかにも平城京で出土した奈良時代の鏡である瑞雲双鸞八花鏡が出土した湯舟口の金谷一号墳が知られる。大正六年に盗掘され、出土した遺物は、大正八年に鏡と須恵器長頸壺で東京国立博物館に寄贈、所蔵されている。

鏡は金工室で、長頸壺は考古課原史室で保管されている。

私はこの出土遺物を平成三年八月十六日と平成四年二月七日に観覧している。

湯舟口（通称成林（なるばやし））には金谷群集墳として、三基の古墳時代後期の横穴式石室の古墳があり、三基とも盗掘されている。一号墳は、盗掘を受け、石室に天井石が一石残る。二号墳は、上層が盗掘を受け天井石が破壊されている。三号墳は、横穴式石室の側壁石が残るのみである。

私は古墳の位置について調査を続けていたが、金谷山部古墳は尾根上の先端に位置していることから、古墳時代中期頃と考えられる。内部構造は不明であるが、時期的にみて木棺直葬墳か、あるいは箱式石棺ではないかと考える。

金谷群集墳は国見山の山麓の湯舟口（通称成林）の金谷丘陵上に位置するところである。

金谷一号墳からは、かつて川戸や揖保川がみえる高台であったように思われる。

今回の調査でわかったことは、金谷の古墳の位置について山部古墳のある亀ケ尾と上比地の観音山の山麓のちょうど中間地点に金谷群集墳の金谷一号墳があるところではないかと考えられる。

中間地点の湯舟の谷間であり、なるいところで、後期の横穴式石室を築造するのに適したものと考えられる。現時点で推定しているので私論であるが、私は金谷のこの地がもっともふさわしかったものと思う。

被葬者については、山部古墳から後期の金谷古墳、そして一号墳は奈良時代の鏡が出土していることから追葬したもので、『播磨国風土記』宍禾郡比治里に見える里長の山部比治の祖先の古墳ではないか。

鏡については、千本屋に奈良時代の古代寺院があり、発掘調査で法起寺式の伽藍配置とされる。この寺院は、山部氏の氏寺と関連するとされるので、この寺院とも関連する人が被葬者ではないか。

鏡を所持していた人は、金谷鏡が平城京で出土した鏡に近いことから平城京ともつながりがある人ではないかと思われる。

今後の調査でさらに解明できるものと考えられる。

宍粟市の梵鐘（江戸時代）年代順集成（Ⅰ）

片山昭悟

1

山崎町　山崎八幡神社の梵鐘

寛永十二年（一六三五）初鐘

延宝四年（一六七六）改鐘　長谷川孫兵衛尉藤原吉正

貞享四年（一六八七）重鐘　冶工長谷川五郎兵衛尉藤原家継

同　孫兵衛尉藤原吉継

『兵庫県神社誌』によると、貞享二年（一六八五）本殿再造

2

千種町千草　西蓮寺の梵鐘

西蓮寺鐘銘並序写によると、

慶安四年（一六五一）

延宝五年（一六七五）

3

一宮町須行名　名畑観音堂の梵鐘　現存

万治三年（一六六〇）

寛文六年（一六六六）鋳直

貞享二年（一六八五）再鋳

冶工　姫路京口住

小野市兵衛尉藤原家信

宍粟市指定文化財　新田義貞寄進とされる

4

山崎町　妙勝寺の梵鐘

安井俊二氏の梵鐘調査によると

天和年間（一六八一～一六八四）の鐘

明治十三年（一八八〇）の梵鐘銘から

安政の大砲に供出されている。

5

波賀町日見谷　赤山観音堂の鰐口現存

日見谷村赤山観音

元禄五年（一六九二）九月吉日

昭和四十年（一九六五）頃に中央で鉦をたたき念仏（南無阿弥陀仏）を唱えながら数珠を回し、村の安全と風雨の順調を祈った。「追憶　ふるさと写真集」二〇〇八より

6

山崎町　大雲寺の梵鐘　山崎

鐘銘集によると、

元禄七年（一六九四）初鋳

享保五年（一七二〇）再鋳

7

一宮町福知　大徳寺の喚鐘　一宮　現存

元禄十年（一六九七）丁丑（ひのとうし）年七月自恣日

冶工三条釜座和田信濃掾國次

「播州完粟郡三方庄

福智村法雲山大徳寺」

8

山崎町中野　願立山極楽寺の喚鐘　蔦沢（現存）

元禄十年（一六九七）七月廿三日

出羽大掾

室町宗味作

梵鐘は、鐘歴によると、宝暦三年（一七五二）とある。

9

一宮町森添　御形神社の鐘　一宮

「宍粟郡内寺社の鐘々写し」によると、

宝永元年（一七〇四）歳在甲申（きのえうし）十一令旦
冶工　義貞耳孫住金谷
長谷川孫兵衛
播州完粟郡味方多加美大明神
廣瀬郷金屋村長谷川孫兵衛藤原吉久

10 山崎町青蓮寺の喚鐘　山崎（現存する）
宝永三年（一七〇六）

11 山崎町　光泉寺の喚鐘　山崎
「光泉寺供出記録」によると
宝永四年（一七〇七）丁亥歳　九月二十一日造之　とある。
梵鐘は、「宍粟郡内寺社の鐘々写し」によると、
享保十五年（一七三〇）とされる。

12 波賀町安賀満願寺の旧梵鐘は、鐘歴によると
正徳二（一七一二）　壬辰（みずのえたつ）年三月
姫路京口之住
小野太郎左衛門尉藤原正家

13 山崎町五十波　本源寺の喚鐘（現存する）
正徳四年（一七一四）十一月

14 山崎町　明源寺の喚鐘（現存する）
享保六年（一七二一）
小野六太夫

15 山崎町中野　徳王寺の梵鐘
鐘銘によると、享保九年（一七二四）

16 波賀町安賀八幡神社の鐘　波賀
「宍粟郡内寺社の鐘々写し」によると、
冶工　同国同郡広瀬郷金屋村
長谷川孫兵衛尉藤原吉信
時　享保十一丙午（ひのえうま）年（一七二四）三月十六日

17 山崎町　光泉寺の梵鐘　山崎（現存する）
梵鐘は、「宍粟郡内寺社の鐘々写し」によると、
享保十五年（一七三〇）とされる。

18 西蓮寺の双盤　千種（現存する）
享保二十年（一七三五）
京室町住出羽

19 山崎町母栖村道場元喚鐘　山崎（現存する）
宝暦四年（一七五四）

20 一宮町河原田八幡宮銅鐘
宝暦四年（一七五四）歳次甲戌春三月廿一日
冶工同郡廣瀬金谷村之住
藤原
長谷川孫兵衛尉吉正
仝右五郎兵衛尉家次

21 一宮町西安積　普門寺の旧梵鐘　一宮
宝暦六年（一七五六）
冶工　摂州大坂住鋳物師杉田伊衛門
淡路津名郡柳澤村
岩上大明神鐘
現在の梵鐘は、京都岩澤の梵鐘である

22
山崎町　桓武伊和神社の梵鐘　蔦沢（現存する）
宝暦十一年（一七六一）辛巳（かのとみ）歳十一月吉日
播州宍粟郡金屋住
冶工　長谷川孫兵衛藤原吉正
長谷川五良兵衛藤原家次

23
正徳二（一七一二）壬辰（みずのえたつ）冬
十一月下旬鋳洪鐘
山崎町上牧谷　元有谷山菩提寺の喚鐘　蔦沢（現存する）
元有谷山菩提寺
宝暦十一年（一七六一）
冶工　高田住　中村弥右衛門…上郡の鋳物師

24
山崎町春安　願行寺の喚鐘　（現存する）
宝暦十二年（一七六二）壬午（みずのえうま）
京三条釜座和田信濃
「播州宍粟郡　山崎」；播州宍粟郡は陽刻

25
千種町岩野辺　福海寺の喚鐘　千種（現存する）
宝暦十三年（一七六三）癸未（みずのとひつじ）三月吉日
京三条住国松近江

26
千種町千草　西蓮寺の喚鐘　千種（現存する）
宝暦十三年（一七六三）癸未（みずのとひつじ）十一月日
冶工　菅原安欲

27
波賀町斎木　醫王山安養寺の喚鐘　波賀（現存する）
宝暦十四年（一七六四）鋳直
京三条釜座和田信濃

28
一宮町河原田　大日山正福寺の鰐口　鰐口（現存する）
三方庄　河原田村氏子中　宗兵衛
願主　庄屋宇右衛門
八幡宮
宝暦拾四年（一七六四）申正月吉祥日

29
一宮町伊和　神福寺の梵鐘　一宮
「宍粟郡内寺社の鐘々写し」によると、
明和元年（一七六四）初鋳
寛政四年（一七九二）再鋳
鋳工　同郡
金屋住
長谷川孫兵衛尉藤原吉則

30
山崎町　上ノ観音堂（順礼堂）の喚鐘（現存する）
明和七（一七七〇）庚寅（かのえとら）歳二月吉日
播州宍粟郡金谷村住
大工　長谷川孫兵衛藤原吉正

31
山崎町上ノ　岩上神社の梵鐘
「宍粟郡内寺社の鐘々写し」によると、
明和八（一七七一）歳次卯春歳三月吉日
大工　同国同郡金谷村住人
長谷川孫兵衛藤原吉正
〃　五郎兵衛藤原家次

（以下次号に続く）

会員・家族の文芸

◎短　歌

朝日さす江戸切子の水飲みほして
今日が始まる六月の朝　竹田　長司

大きなる具を好む吾がカレーライス
匙一杯のジャガ芋がよい　竹田　長司

今朝もまたデイサービスで日を問へば
火曜と言へりいつもの人が　竹田　長司

◎冠　句

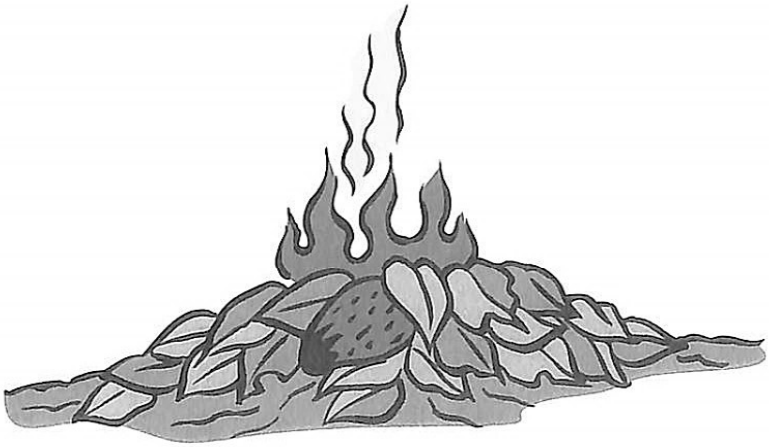
住所録　年賀の数も　少し減り　中瀬　公三
住所録　友の死寂し　二重線　実友　勉
住所録　想いはページ　飛び越えて　谷笹　摩弥
住所録　若かりし日の　君想う　大谷　志路
住所録　遠きふる里　其処になく　坂本　忠彦
住所録　思い浮かべる　友の顔　三木ひづる
住所録　思いを馳せる　学び舎に　嶋津　千里
語ろうよ　炬燵に入り　のんびりと　中瀬　公三
語ろうよ　地域興しに　熱入る　実友　勉
語ろうよ　湯気に溶け出す　三十余年　谷笹　摩弥
語ろうよ　ほろ酔い酒の　夜半過ぎ　大谷　志路
語ろうよ　宍粟の宝　町おこし　坂本　忠彦
語ろうよ　あなたが生きた　この道を　三木ひづる
語ろうよ　同じ体験　分かち合い　嶋津　千里
夜のラジオ　ついうとうとと　夢の中　中瀬　公三
夜のラジオ　なつメロ耳に　眠りつく　実友　勉
夜のラジオ　声に恋して　葉書書く　谷笹　摩弥
夜のラジオ　聞くでもなしに　ながら族　大谷　志路
夜のラジオ　昔を偲ぶ　ながら族　坂本　忠彦
夜のラジオ　歌声響く　闇の中　三木ひづる
夜のラジオ　ヤンリク聞いた　日は遙か　嶋津　千里

◎俳　句

毘盧舎那仏四百余螺髪冬に入る　京屋　伊助
痩身の太るすべなし去年今年　京屋　伊助
七日粥みどりのかをり吹きこぼす　京屋　伊助
冬帝のガウンの裏地花模様　里見　和樽
愛憎を隠して浮かぶ春の雲　里見　和樽
美しき蝶にならむと茨食む　里見　和樽
童謡のチャイム流れて峡おぼろ　杉山美保子
蛍火が彷徨ふやうに近づきぬ　杉山美保子

薔薇の園王妃王女の名を連らね　杉山美保子
蹴鞠庭喚声上がる秋の御所　高井　智代
琳派展待つ間も楽し庭紅葉　高井　智代
仏前の煮込み御飯が秋収め　高井　智代
古民家を今はカフエに花の昼　田中　良子
指影絵孫としてみる良夜かな　田中　良子
大漁旗なびいて瀬戸の鰯雲　田中　良子
初芹の朝餉に香る箸休め　田中　慶英
春泥の杖を洗ひて坊の宿　田中　慶英
春光や風の誘ふ一万歩　田中　慶英
一刷毛に雲遊ばせる里の秋　鳥羽チエノ
忘れめや柚子もたわわの俳句展　鳥羽チエノ
登校の子らにすれすれ夏燕　鳥羽チエノ
古稀迎え妻に感謝す桃日和　西嶋　忠義
水行の僧に湯気立つ寒土用　西嶋　忠義
焼牡蠣の香に瀬戸の幸満喫す　西嶋　忠義
わたつみの満願に降る春の雪　速水美知代
前向きに生きて余生の寒椿　速水美知代
客人の言葉集めし黄水山　速水美知代
凩や幼な引き寄す母の胸　三浦　ゆき
越し難きこの世の憂い夕時雨　三浦　ゆき

散り敷いて尚山茶花の咲き誇る　三浦　ゆき
一人増え話題の変わる日向ぼこ　宗平　圭司
三音の飛ぶレコードの寒き音　宗平　圭司
木の葉髪鏡の中に~~老~~[55]の顔　宗平　圭司
せせらぎに落葉のあまた堰つくる　矢野登次郎
ひらひらと落葉吹きよせ行者橋　矢野登次郎
余生とはこんなものなりはや師走　矢野登次郎



事務局だより

平成二十八年度山崎郷土研究会総会のご案内

本会の総会を左記により開催いたしますので、会員の方々はお繰り合わせのうえ、是非ご参加下さるようご案内いたします。

記

日時　平成二十八年四月十六日（土）午後二時より
場所　宍粟防災センター　四階　研修室
内容　事業報告、会計報告、事業計画、予算審議その他
　　アトラクション　ＤＶＤの鑑賞（予定）

なお、このお知らせをもって、総会のご案内とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

編集後記

『山崎郷土会報　第一二六号』をお届けします。

Ａ４サイズになって二回目の号です。

『山崎郷土会報　第一二六号』は、原稿を書いていただいた会員の皆様のご協力で発行することができました。いずれも大変貴重な原稿ばかりです。ぜひとも御覧いただきたいと思います。

『山崎郷土会報』は、会員の皆様にとって読みやすくわかりやすいもので興味や関心があることを会報部で心掛けています。

地元の郷土の調査と研究をすることであり、郷土の歴史を正しく伝えること。山崎の地域の伝承を伝えること。そして、次代につなぐ大切な役割があることです。「温故知新」という言葉は、古きを訪ねて新しきを知ることです。

今年は、申（さる）年で、十二支の九番目です。

調査研究テーマや身近な話題なども紹介したいと思っています。会員の皆様の原稿を募集しますのでご協力をよろしくお願いします。

それから、郷土会員の皆様にお知らせしますが、年末まで山崎町今宿の揖保川の山崎藩主本多氏の別邸のあった浜御殿跡周辺には石垣が当時のまま残っていました。

山崎郷土研究会では山崎の江戸時代の歴史を伝える郷土の資料として後世に残しておきたい貴重な資料であることから、現状保存を再三陳情してきましたが、揖保川の堤防工事により、江戸時代の貴重な資料が消滅しました。

山崎郷土研究会の声が届かなかったことがまことに悔やまれます。

「山は動かせても人の心は動かせない」ということわざがありますが、そう思うのは私だけなのでしょうか。（片山昭悟）

役員名簿　平成二十七年度・平成二十八年度

役職名	氏名	住所	電話
顧問	春名　俊夫		
会長	大谷　司郎		
副会長	浅田　茂樹		
事務局長	里見　亘		
会報部長	片山　昭悟		
研修部長	坂本　忠彦		
史跡部長	伊野　操治		
山崎地区西支部長	正林とみ子		
山崎地区東支部長	伊藤　一郎		
山崎地区北支部長	伊野　操治		
城下地区支部長	片山　昭悟		
戸原地区支部長	金山　敞史		
河東地区支部長	衣笠弘一郎		
神野地区支部長	上田　泰三		
蔦沢地区支部長	宗平　圭司		
菅野地区支部長	浅田　茂樹		
土万地区支部長	赤松　茂毅		
監事	河本　雅視		
監事	三宅　保雄		

平成二十七・二十八年度　各部構成						
会報部長	片山昭悟	河本　雅視	浅田　耕三	鎌田　裕明	竹内　克司	
研修部長	坂本忠彦	宗平　圭司	石野　和雄			
史跡部長	伊野操治	伊藤　一郎				

パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有)稲田印刷

〒671−2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL(0790)62−0254 FAX(0790)62−4764

まごころを伝えます。

一献献上　品質本位

播州一献

地酒

山陽盃

確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010　FAX0790(62)6218
E-mail　info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

いとう画廊

兵庫県宍粟市山崎町山崎413
TEL(0790)62−0371
FAX(0790)62−0371

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

御菓子司 あらき

本　店：播州山崎町山田（電）62−0160

外科・内科

山中医院

院長　山中潤一

山崎町西町・TEL(62)0036

ほっと、ひといき

伊沢の里

●各種宴会　祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
●宿泊　観光、ビジネス　帰省
●日帰り入浴　生薬風呂、露天風呂、サウナ
●レストラン　御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214−1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S

スタジオウエヤマ

●山崎店　兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL(0790)62-8027
FAX(0790)62-8827

株式会社 **安井書店**

ブックランド店
山崎町中井
TEL(64)2051・FAX(64)2052

本店(文具部)
山崎町中井
TEL(62)0700・FAX(62)2117

http://www.yasuisyoten.co.jp/